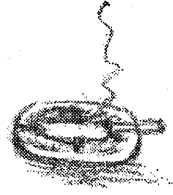


「日本幼児保育史」研究余滴（一）

村 山 貞 雄



はじめに

日本保育学会著「日本幼児保育史」（フレールベル館発行）が昭和五十年五月、第六巻が発行されて全六冊が完結しました。そのお祝いが六月十二日、神楽坂にある出版クラブでささやかに行なわれました。その席で、執筆者たちから、共同研究中の苦勞ばなしや裏ばなしが話され、出席された人々の強い興味をひきました。

そしてこれらの話を本に載せて多くのの人々に知ってもらったらという意見が持ちあがりました。この会には、執筆者の一人として津守真先生が出席しておられました。先生が編集しておられる「幼児の教育」で引きうけてくださることになり、これらの話が本誌の新年号から連載されることになりました。今月号は、その第一回で、やや固苦しい話になりますが、私が前座をつ

とめさせていただきます。

本誌に、幼稚園百周年に当たる昭和五十一年の新年号から、この保育史うらばなしを連載できるようになったことを衷心から嬉しく思います。

形式的だったスタート

今から二十年ほど前の話になりますが、昭和三十一年のことで、東京女子師範学校の附属幼稚園が明治九年に創られたので、昭和三十一年はちょうど八十周年になり、文部省主催だっと思えますが、多分その年の十一月には記念式典が日比谷の公会堂で行なわれたように思います。

この年、日本保育学会でも、八十周年を記念して何か研究をしようということになりました。

五月頃でなかつたでしょうか。常任委員会でもともと八十周

年という歴史的なことの記念なのだから、歴史的な研究がよいだろうということになって、「本邦幼児教育史の研究」を始めることが決まりました。共同研究の委員は、会長（委員長）のほか二人の副会長と九年の常任委員の全員が就任しました。私も常任委員をしていたので研究委員の一人になりました。

しかし実際にはこの研究委員が研究に当たるといっわけは全くなく、すぐに小委員会というものが作られ、小委員会の委員が、それ以後、実際の研究を全部してきました。小委員会の委員のかたがたは、これから本誌に、毎月一人ずつ保育史のうらばなしを書かれますから、ここでは名まえをあげずにおきましょう。

どうして、研究委員会と研究小委員会というような二本建ての面倒くさいことをしたかと言いますと、一つにはこの研究委員会はまだほかの研究テーマも取り扱おうという気があったような感じがしますが、大きな理由は、学会の共同研究だから、学会の常任委員が当然委員になるべきだという気持ちがあったのでした。また、そうしておかないと、学会の偉い人からソッポを向かれ、経済的な協力その他の協力が得られなくなる心配もあったような気がします。今から考えると、当時はずいぶん官僚的・形式的なふんい気が盛んだったように思えます。

小委員会の委員のかたは、今は皆さん立派な学者になっておら

れますが、その頃はまた将来を嘱望された新進の学徒だったものです。これらのかたは、将来大をなす素地を当然持つておられたのでしようが、同時に、この共同研究に参加することによって伸びられた面もあったのではないのでしょうか。私はこの小委員会の委員長になりました。

共同研究のむずかしさ

小委員会の委員には、私のほかに学会の常任委員がいませんでしたので、以後、私は学会と小委員会との連絡の仕事もしてきました。その間、研究があまり長びくので、学会（常任委員会）の方から、時折り催促され、そのたびごとに小委員会に伝えて、皆さんに研究のスピードをあげることをお願いしたものでした。なししろ研究を始めてから約二十年経った昭和五十年に研究が一応完結したわけですから、学会の会長・副会長をはじめ常任委員や会員のかたがたも、ずいぶんしびれを切らしておられたことと思います。

しびれを切らしたのは学会だけではありませんでした。研究結果を発行することになっていたフレイベル館からも、しょっちゅう文句を言われたものでした。フレイベル館に対しては研究を始めてから数年後に二冊の本を出すことを約束していたのですが、

それがなかなか出来ず、昭和四十三年になってやっと第一巻が発行されました。第一巻に私の書いた「まえがき」を読み直してみましたところ、「この共同研究が今回まとめられて三冊の本になったわけであるが、委員一同十余年の苦勞を顧みて心からの喜びを禁じ得ないでいる」と書いています。このとき、二冊を三冊に変更することにしてフレイベル館の了解を得たわけですが、このまえがきにあるように、三冊を相次いで発行する約束をしたものでした。それが第二巻の出るのも遅れてしまい、昭和四十三年に第二巻が四十四年に第三巻が、さらに四十六年に第四巻が出、第五巻は昭和四十九年になりました。この間、フレイベル館からは「いぶん文句を言われ、板ばさみになった私は、性格の弱さもあって困ってしまうことが少なくありませんでした。実際、読者が忘れた頃になって思い出したように次の巻が出るのでは、売れゆきも悪くなり、フレイベル館の計画も立たず、また、すでに買った人から社に文句もきたようで、フレイベル館に迷惑をかけてしまいました」。

この経験から思うのですが、共同研究というものが、いかにむずかしいか、今後いい加減に共同研究は始めるべきでないという気がします。とくに昭和四十年過ぎからは、小委員の先生方も最もいそがしい第一線の学者となられ、皆で集まるようなことがま

すまずむずかしくなってきましたが、一流の学者の共同研究は本当にむずかしいことなので、共同研究は始められるかたは、よほど考えてから始められるべきであると、つくづくと思います。

それでも曲がりなりに、この共同研究が成功した原因の一つは、全員に分担内容を明らかに区分して、各章の終わりにそれぞれ執筆者の名前を記入するようにしたことでした。

一寸先は闇だった

私はたまたま江戸時代の幼児の教育を調べていたので、明治以後の幼児保育のことも知っているだろうと思われて、小委員会の委員長にされたのでした。

しかし私は明治時代のことには全く知らなかったのです。それで、ほかの小委員の先生がたも、内心、頼りないやつだと思われて、軽蔑されていたのではないかと思います。はじめの数年はよく会合をもちましたが、その頃の先生がたの態度から、そのようなことを感じたものでした。

そこで私は無我夢中になって頑張りました。霧のロンドンを歩いていると一尺先が見えず、歩いて行くにしたがって少しずつ先が見えてきます。研究するにしたがって明治時代の保育の姿が次第に分かってくるありさまは、まるで、この霧のロンドンを歩い

ているようでした。そして明治時代を研究しているときは、大正時代のことはまだ全然分かりませんでしたし、大正時代をやっているときは、昭和のうち戦前のことは全然分かりませんでした。

先ほど研究が長びいたのは共同研究のせいのように言って、私の責任のないような言い方をしましたが、こんなことが、研究を長びかせた一番大きな原因だったかも知れません。

しかし私にとっては、この研究が「なんでもやれば出来る」という自信（信念）を作ることになりました。また全然新しいことにも落ちついて着手する自信（態度）を作り、これが現在の私の役職の遂行に役だっています。

研究が人生観を高めてくれた

実際、研究を始めるにしたがって、つぎつぎに新しいことが発見され、明治初期だけで一冊ぐらいの分量になってしまい、二冊の予定が三冊になり、三冊の予定が最後には六冊になり、しかも六冊の終わりが昭和二十三年ということになるなど、長い時間がかかってしまいました。

しかし長いあいだ一つの研究をしてきたためによかったことも少なくありませんでした。とくに私自身のためにいろいろ役に立ち、この研究をさせてもらったことは、有難いことだと心から感

謝しています。

たとえば、深みのある研究には時間がかかることを知りました。昔の人が「運、鈍、根」ということを言っていますが、根気ということの大切さを実感しました。

とくに研究の初めの頃はたいへんでした。いろいろな土地に行つて資料を見つけても、今のようコピーするのではなく、これを書き写したものでした。今なら三十分もかからないことを、たつぷり一日かかって一心不乱に書いたものです。書いたあとで、どこか間違えてないかと思つて読み直すなど、ほんとうに気の疲れるたいへんな仕事でした。今の学生を見ていると、その点、コピー、計算機などが使え、ずいぶん楽になっています。文明の利器は、これをどしどし積極的にマスターして使用することは賛成ですが、学間に必要な「落ちついて根気よく」という点が欠けてきているように思えます。この点は、今の学者の反省しなければならぬところでないでしょうか。

それから、こんなことにも気がつきました。それは、ずいぶん、まちがったことも伝わっている、歴史というものは、近いことでも正確でないことがたくさんあるということなんです。ごく最近のことさえ、語る人によって、内容がかなり違っているのです。ここから、私たちはそれを言わないようにして、できるだけ

正しいことを伝えることが大切だと思いました。しかし、それよりも増して感じたことは、昔の人に対して、軽々しく批判してはならないということです。また世の中には埋もれた（埋もれたという言葉を使うのもおかしいですが）立派な人がたくさんあることに気がつきました。こんなことから、地方に調査に行ったときなど、歴史の流れの中の一つの時点で短い生を受けた自分の生き方を考えたものでした。どのような態度で人生を生きぬくのが最も価値のある生涯なのかと考えました。この研究は私の人生観を高めてくれたと言えます。

忘れ得ぬ思い出のいろいろ

長い研究のあいだには、いろいろなことがありました。資料さがして神田の古本屋街を歩いていたときのことでした。ある書物が、数軒の本屋のどこでも一万円を越していたのが、ある本屋で三千円で売っているのを見つけて、とても嬉しかったのを覚えています。しかし、買ったあとで、その本屋さんに対して悪いことをしたような気になりました。

こんなこともありました。東京女子師範学校の附属幼稚園を調べているうちに、この園の保母さんである豊田英雄氏が、藤田東湖の姪で、暗殺された勤皇の志士豊田氏の未亡人であるというこ

とを知ったとき、私はたいへん感激しました。

今まで江戸時代の子どもの教育を調べていた私にとっては、あの幕末から明治維新の混乱のさなかに日本の幼稚園が誕生している当時の雰囲気を実に感じて、感慨うたたなものがあつたのです。

それで私は大学で学生たちに、日本の最初の保母さんは藤田東湖の姪であることを感激をもって語ったものでした。しかし学生たちは、まったく無表情でビクッと表情を動かしません。私はもう一度言い直しましたが、反応はまったくありませんでした。私はガッカリしました。

そのあと、私は研究室に帰ってから考えてみて、今の学生たちは、藤田東湖が有名な学者であり、勤皇の志士であり、安政の大地震のとき、お母さんを助けようとして家にとびこんで亡くなった人であるということを全然知らないのではないかと思えました。

私は昨年ふとそのことを思い出して私の息子どもに、「大学の授業で『日本の最初の保母さんは藤田東湖のめいだ』という話をしたが、学生はビクとも表情を動かさなかったので、お父さんはガッカリしたもんだよ」と話しました。すると大学二年生のその息子は、「お父さん、その藤田東子^{とうし}という女の人は何をした人な

の」とたずねたものです。百年たてば、ほんとうにいろいろなことが変わるものです。

長い研究のあいだには、たくさんの人々から協力を得ました。親切にしてもらって涙が出るほど嬉しかったこともあります。たとえば東北地方へ行ったとき、汽車の中で知り合った人が「盛岡に古い幼稚園がある」と言っていて、わざわざ盛岡幼稚園に連れて行ってくれました。そして最後まで世話をしていただきました。最初は、けんもほろろだったり、非常に剣幕だった人が後には熱心な協力者になってくれた人もありました。富山のアームストロング女史はその一人です。

ある地方の幼稚園に、借りていた資料を返しに行ったときのことでした。人のよさそうな園長さんから「たいへんお役に立つと思われる資料があったのですが、誰だったかに貸してあげたところ、返してくれないので残念です。今の人は約束の期限を守らなくなりましたが、嘆かわしいことですね」と言われました。その資料を借りたのが、実は私だったので、返すために持って行った資料を出しそびれてしまい、また汽車に揺られて帰ってきることがありました。

協力を得た人のうち、何人かの人は、国木田独歩の作品のように、私にとって「忘れ得ぬ人」となりました。そのなかには、す

でに亡くなった人もあります。資料収集中に起った、こんな人間関係をもとにしたいろいろな出来事をお話しく思うのですが、与えられた枚数が尽きましたので、そろそろペンを置くことにします。しかし、次号から連載される先生がたのお話の中に、そのような具体的なこぼれ話やエピソードがたくさん出てくると思います。楽しみにしてお待ちください。

最後にひとこと付け加えますと、私は十五年ほど前に日本女子大学を卒業したある学生から、この夏、信州の山荘で暑中見舞を受け取りました。そのなかに「自分の在学中、演習の時間、先生がたいへんな熱意をもって、その頃研究しておられた保育史の話をされたが、あれは自分の学生時代の一番強い思い出」という趣旨のことが書かれていました。その頃、私は演習で「日本の保育史」をテーマにして、共同研究で調べてきたことを逐次学生に話していたのです。どちらかというと女子学生から敬遠される私は、卒業生から便りをもらうということはありませんでしたが、それにしても、自分が熱中していたあの頃の私の気持ちは学生の心にも感銘を与えていたのかと思います。私は谷川の水がせせらぐ音と小鳥のさえずる声に包まれた山荘で、ひとり感慨に耽ったものでした。

(日本女子大学)